

☒ "Was kann ich für Sie tun?"  
は「偉そう」か？-常用句を利用したコミュニケーション  
行動の 日独比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード: 作成者: 西嶋, 義憲, Nishijima, Yoshinori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00000438">https://doi.org/10.24517/00000438</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「かいろす」第41号別冊  
平成15年12月15日発行

„Was kann ich für Sie tun?“ は「偉そう」か？  
— 常用句を利用したコミュニケーション行動の日独比較 —

西 嶋 義 憲  
(Yoshinori NISHIJIMA)

(Kairos 41)

Kairos-Gesellschaft für Germanistik

Fukuoka Japan 2003

# „Was kann ich für Sie tun?“ は「偉そう」か？\*

— 常用句を利用したコミュニケーション行動の日独比較 —

西 嶋 義 憲

## 0. はじめに

どの言語にも特定の場面で繰り返し使われる決まった言い回し、すなわち常用句 (Routineformeln) がある。常用句の中には、異なる言語間で機能上対応する表現もある。ところが、機能上等価であっても、異なる言語の対応表現は、その発現形態の異なりから違和感を覚えることがある。このような印象の違いは、言語表現が形成する視点の位置と関係がありそうだ。本稿では、対応する場面で使用される日本語とドイツ語の常用句について、その形式と意味および使用条件を比較対照することで、表現と視点の関わりを調査する。それによって、それぞれの言語社会で期待されるコミュニケーション上の通常性の維持に視点の位置が重要な役割を果たしていることを明らかにする。

## 1. 導入

### 1.1. 印象の違い

ドイツの大学では、学生がオフィスアワーに教授を訪問すると、簡単な挨拶の後、(1)のような発話で話を促されることが多い：

(1) Was kann ich für Sie tun?

この表現は、学生に対してだけでなく、同僚どうしでも使われる。それどころか、サービス業務がなされる場面（小売店、薬局、旅行会社、機内など）ならどこでも発せられるきわめて一般的な決まり文句だ。<sup>1)</sup>ところが、私はこの表現を耳にするたびに、違和感を覚える。対話相手がいくらにこやかに笑顔で接してくれたとしても、この発話から、話者に対して「偉そうな」「恩着せがましい」「突き放されたような」といった否定的な印象をいだいてしまうのだ。では、日本で同じような場面だったら、どのような

言い方がなされるのだろうか。日本では、オフィスアワーに部屋にやってきた学生に対して教授が、ドイツ語表現を字義通りに訳した(2)のような疑問文を発することはまずないだろう：

(2) あなたのために私ができることは何でしょうか？

相手との関係によって異なるだろうが、おそらく、つぎの(3)のような文を使って学生に話を促すのではないだろうか：

(3) どうしました？

このような表現なら、ドイツ語の場合に感じたような否定的な印象は受けない。むしろ「親しみ」さえ感じる。この印象の違いはどこからくるのだろうか。

## 1.2. 問題点

上で取り挙げたのは、ドイツと日本の対応する場面で使われる常用句である。解決しなければならない何らかの問題を抱えてオフィスアワーに教授を訪ねてきた学生に対して、会話開始部の段階で教授が発する決まり文句だ。この表現は、談話において学生に対してすぐに用件に入るよう要請する合図して機能する。その意味で、ドイツ語(1)と日本語(3)は等価である。たしかに機能上等価だが、表現としての発現形態が異なる。その形態の違いが、上記両対応表現の印象の違いと密接に関係している可能性がある。

もちろん、ここで比べている対象は常用句であり、各言語で受け入れられ、繰り返し使われる決まった言い回しである。その表現構造は、それぞれの言語で妥当性があるのであって、それを異なる言語の観点から見て受け取る印象の違いの問題にすることは一見、無意味に思えるかもしれない。しかし、このような常用句使用に、それぞれの言語のコミュニケーション行動で期待される通常性が関与していると考えられることもできよう。その意味で、類似する場面で使用される常用句どうしを比較することは必ずしも無意味とは言えないだろう。むしろ、それぞれの言語社会でどのような言語行動が自然で、期待されているのかに関して洞察を与えてくれる可能性がある。

上記のドイツ語と日本語の対応する表現を比較すると、相手への配慮を示すための視点の位置に差があることに気づく。<sup>2)</sup> 一般に、言語表現の視点について、日本語は、たとえば英語のように固定していず、可動的とされる。<sup>3)</sup> この説明は、常用句についても当てはまりそうだ。そこで、本稿では、この視点の違いを日本語とドイツ語の機能上等価な常用句表現や翻訳関係にある形容詞について検証する。この視点の違いが、日本語社会とドイツ語社会で期待される行動の違いに関与し、それが印象の違いを引き起こしているとする。

## 2. 機能上等価な表現の分析

### 2.1. 使用範囲の差

前節で取り挙げた表現(1)と(3)は、実はその使用範囲に差がある。ドイツ語の „Was kann ich für Sie tun?“ は、きわめて一般的な表現で、さまざまなサービス業務の接客の場面で使われる。ところが、これに対応する日本語表現は、場面によってさまざまな形で現われる。大学のオフィスでは、「どうしました？」が学生や同僚に対して普通に使われるが、ときに「何かお困りですか？」も使われる。また、面識のない訪問者に対しては「(ご用件は) 何でしょうか？」といった別の表現が用意されている。それ以外のサービス業務の場面では、「いかがですか？」「ご試着できますよ」「何かお探しですか？」「いかがなさいました？」といったようにさまざまな表現が使われる。このように、サービス業務の場面で使われる日本語対応表現はドイツ語と比べると、多様であり、自由度が高いことがわかる。

### 2.2. 大学のオフィスアワー

話を簡単にするために、大学での学生による教授との面会という場面(オフィスアワー)に限定して比較してみよう。大学という制度は、さまざまな学問が研究され、その成果が教授される場であり、普遍性がある。オフィスアワーにおける相談という場面は、そのような大学という制度に条件づけられている。それがなされる場は、多くの場合、教授のオフィスである。通常、面談時間帯はあらかじめ設定されている。学生は、その時間内ならば、いつでも教授を訪問し、相談を受けることができる。そこで行なわれるスピーチイベントの参加者は、もちろん学生と教授である。教授は、学生に対して問題解決のために専門家の立場から助言することが

期待されている。両者の間には社会的な力関係に差があり、心理的距離もある。したがって、そこで使用されることばのスタイルは、あらたまったものとなるのが普通である。その意味で、ドイツと日本とは大差はない。<sup>4)</sup> そのような大学という制度内で学生が教授に面会に行くと、一般に、ドイツでは „Was kann ich für Sie tun?“、日本では「どうしました?」という表現でそれぞれ用件へと話が促される。両者から受ける印象の違いを調べるために、以下では両表現を、形態、表層上の意味、視点に関して比較する。

### 2.3. 比較

ドイツ語の „Was kann ich für Sie tun?“ は、形式的には聞き手の利益のために、話者がしてあげられることが何かあるかを問う補足疑問文である。表層的な意味としては「援助の申し出」となる。<sup>5)</sup> この発言は、談話の中では学生に話を促すための合図として機能する。表現内の語彙で注目すべきは、行為主体の人称代名詞 „ich“ と行為の向けられる相手特定する前置詞句 „für Sie“ である。援助を行なう主体と、援助を受ける客体とが峻別されて言語化されていることが注目される。

他方、日本語の「どうしました?」はどうであろうか。これは、何が起こったのかを尋ねる疑問文という形式であるが、表層的な意味は聞き手に対する「気遣いの表明」となる。<sup>6)</sup> この談話組織上の機能は、ドイツ語と同様に学生に話を促すことにある。しかし、ドイツ語表現と異なるのは、話者と聞き手が言語表現として明示されていない点である。したがって、話者と聞き手の対立も表出されていない。むしろ、そのために話者はこの質問を通して聞き手に心理的に近づき、その身に何か問題がおきたのかを案じているような印象を与える。

### 2.4. 視点の違い

ドイツ語と日本語対応表現との差は何か。談話上の機能は、すでに述べたように制度による制約を受けているので、共通している。すると印象の違いは、常用句の言語表現とその表層上の意味に由来すると考えざるをえない。日独両表現をこの点で比較することにより、話者の聞き手に対する接し方やコミュニケーション態度を考えてみたい。<sup>7)</sup>

ドイツ語表現の表層的な意味は、「援助の申し出」という形式をとって発

現し、表現の行為者とその受益者が言語化されている。この表現では、援助者の立場から事態を眺め、その視点から相手の利益のために何ができるのかを尋ねているわけである。援助という好意を施す主体とそれを受ける受益者とが峻別され、それが発話主体の視点から表現されている。この対立によって、援助行為の方向性が鮮明に表出される。ドイツ語社会では、教授はこの表現を利用してすみやかに学生にその用件を言わせようとする。学生は、それに応えて、抱えている問題を説明する。通常、どのような問題かについてはすでに整理済みで、それをためらいなく表現することが期待されている。たとえば、教授の演習に出席している学生がゼミ論文の評価を依頼するという場合、その依頼内容を一息で言い切るのが普通である。このような行動は後で日本語の例と比較するとわかるように、明らかに日本社会のそれと異なる。<sup>8)</sup>

日本語社会では、「どうしました」という極めて抽象的な表現で教授はまず相手への気遣いを表明する。この日本語表現には、そもそも主体が明示されていない。問いかげられる客体として聞き手が暗示されているにすぎない。その聞き手の身にどのような問題が起こったのかを間接的に尋ねているわけである。つまり、聞き手の抱えている何らかの問題に対して気にかけているという態度を表明する作業がまずなされるのだ。それに対して学生は問題を話し出すが、その際、ドイツ語社会のように一息に話すことはまったく期待されていない。むしろ、もしそのように話すと、「生意気」といった否定的な印象を与えてしまうことさえある。したがって、多くの場合、教授による補完という協力を待つのが普通だ。これによって学生は謙虚さを示すわけである。たとえば、典型的な流れとしてつぎのような会話が想定できる<sup>9)</sup>：

教授：どうしました？

学生：あのう、演習のレポートを書いたのですが、

教授：あっ、そう。

学生：これがそれなんですけど…

教授：はい、で、これをどうすればいいのかな？

学生：あのう、もしよろしければ内容をチェックしてもらいたいです。

教授：あっそう。わかりました。で、いつまでにすればいいのかな？

この談話構成の差は何を意味しているか。ドイツ語社会と日本語社会のそれぞれの制度の中で期待される行動が異なるということだ。ドイツ語社会では、学生は自分で問題を整理して述べ、教授からの助言を期待する。これは、ドイツ語の決まり文句が、相談者と助言者の立場の違いを明示的に区別して言語化していることと無関係ではないだろう。他方、日本語では、そのような区別が言語化されていない。むしろ心配するという「共感」する態度が表明されている。この点は、教授による積極的な補完という協力を期待して話が展開することを反映しているようだ。

## 2.5. 共感の有無

上記の日独表現の比較によって、「共感」の有無が浮き彫りにされた。<sup>10)</sup>ドイツ語表現では、話者に視点が置かれ、そこから相手のために何ができるかを尋ねている。ところが、日本語表現では、主体が言語化されず、間接的に聞き手に関して何か問題が生じたかどうかを問いかけているだけで、その視点が置かれている場所はいまいである。

視点と共感という点から、ドイツと日本に関して教授の学生に対する、また、学生の教授に対する接し方の違いを図式化できそうだ。ドイツ語表現 „Was kann ich für Sie tun?“ における „ich“ と „für Sie“ の対立を考えればわかるように、教授は話者の視点でそしてそこからのみ学生に接する。視点は、基本的に固定している。教授と学生の役割ははっきり分断されている。学生は、問題点を自分で言語化して提示し、それに対する助言を期待する。教授は、その求めに的確に応じる。両者の視点は決して交わらない。他方、日本語の「どうしました」では、視点がいまいである。主体と客体が明確に区別されていないことを示している。日本語社会では、教授による共感という態度の表明によって、教授の視点は学生の側に容易に投影されるようだ。相手が何かに困ってやってきたということに同情あるいは共感し、同じ視点を共有あるいは同じレベルで考えようとする。そのため、ドイツ語社会のように学生の抱えている問題を黙って聞いているということはまれで、相手の立場にたって、学生の説明に協力する。上記の典型例として挙げた相互のやりとりは、お互いが共感できることを確認する手続きでありうる。なお、この共感とは、多くの場合目上から目下に対してなされることに注意しておいていい。

### 3. 形式的・機能的に等価な常用句の比較

#### 3.1. 発現形態の似た常用句

前節の例に関しては、大学という制度内でのスピーチイベントなので日独両社会で場面がほぼ対応している。ただし、そこで使われる言語表現自体は形式的、意味的に対応していない。その発現形態の違いが、日本とドイツのコミュニケーションの仕方の違いと関係している可能性があるという予測を述べた。本節では、ドイツ語社会と日本語社会の対応する場面で使用される機能上等価な常用句の中で、言語構造に関してもほぼ等価な表現を取り上げる。この種の表現を対比し、「共感」という説明概念がここでも有効なことを示したい。

親あるいは教員が子供ないし児童や生徒の不適切な行動をやめさせようとする場面を考えてみよう。たとえば、共同生活の場で子供が利己的な行為をした場合、日本語社会では(4)のような表現を用いて行動を抑制させることがある：

(4) 他の人のことも考えなさい。

ドイツ語社会の類似の場面では(5)のような表現を使うだろう：

(5) Danke doch auch mal an andere!

親あるいは教員は、円滑な社会生活を営むことができるよう子供に対して行動規範を教える。(4)や(5)は、それを教えるために利用される常用句の一つである。そのような表現を、本稿ではとくにコミュニケーション行動制御表現 (Kontrollierende Routineformeln kommunikativen Verhaltens: 以下 KRKV と略す) と呼んでおこう。親や教員は、このような KRKV を用いて、当該社会で通用している行動規範を教え、それに従わせようとする。

ところで、両表現ともに命令文 (指示文) であり、指示内容も一見同一のようなので、文法的にも語彙の面でも対応し、翻訳関係にあると言える。両者とも、たとえば、ある人が別のある人たちに対して身勝手な行動をとった場合に、その無礼な行為を咎め配慮を促すために使われる表現だ。たしかに、言語構造上および機能上等価に見えるが、その表現姿勢あるいは視点に関して違いがあるようだ。もう少し詳しくみてみよう。

日本語表現(4)の「他の人のことも考えなさい」というのは、視点を他の人のところへ投影し、さらにその人物の心理にまで立ち入るよう要求する。これによって、他の人がどう考えるかを感情移入して考えさせようとするわけだ。これは、「人の迷惑を考えなさい」「自分がもしそうされたらどう思う、いやでしょ」といった他の KRKV とも関連している。すなわち、この表現の向けられている相手に対して、想像力を働かせて、他の人の立場にたち、その人たちの身になって迷惑を思いやり、してはいけないことをわからせようというものである。

他方、ドイツ語の対応表現の „Denke doch auch mal an andere!“ という要求には、日本語のように視点を当該の人物のところへ移動させ他人の立場にたつてその迷惑を共に感じろという意味は含まれていない。„denken“ に関するつぎの辞書説明を参照：

*an j-n / sich etw. d. sein Interesse, seine Gedanken auf j-n / sich / etw. (bes auf j-s Bedürfnisse) konzentrieren: Er ist sehr egoistisch u. denkt immer nur an sich selbst; Du solltest mehr an deine Familie d.!*  
(LDaF: S.216)

この語義説明に基づけば、他人に対してその人が何を望んでいるかについて関心を持ち、考えろということで、基本的な意味は自分だけでなく相手の立場も重んじろという点にある。

同様の違いは、次の類似の構造をもつ表現(6)と(7)についても言えるが、こちらのほうではドイツ語表現に関しても視点の投影が生じている：

(6) 俺の身にもなってみろ。

(7) Versuch doch mal, dich in meine Lage zu versetzen!

日本語の表現(6)は、聞き手に対して話者の立場にたつて、すなわち話者に視点を投影し、感情移入することで、その苦境に共感あるいは同情しろという指示である。他方、ドイツ語の表現は、話者と同じ立場あるいは条件だったらどうするのか、その立場または条件の違いを考慮するよう言っているのである。その際、たしかに視点を話者の側に投影するよう要求しているが、日本語のように話者の心理にまで感情移入するよう相手に求め

ているわけではない。つぎの „versetzen“ に関する辞書説明を参照のこと：

*sich in j-n / etw. v. sich vorstellen, an j-s Stelle, in e-r bestimmten Situation zu sein <sich in j-s Lage / Situation v.> : Versuch doch mal, dich in meine Lage zu v.! (LDaF: S.1081)*

人は、それぞれ独立した個人であって、それぞれ考え方が違うという個人主義的な前提にたてば、基本的に感情移入は不可能と見なされる。同じ条件下だったら、あなたはどうか判断してくれというのであって、話者に共感するよう要請しているわけではないことに注意しておこう。<sup>11)</sup>

### 3. 2. 視点とその移動

これらの常用句を比較してわかることは、基本的にドイツ語も、日本語と同様に表現の視点は移動あるいは投影可能であるということだ。違いは、日本語では、視点の移動が投影先の対象人物の心理にまで及ぶという点である。相手の身になって、つまり相手と同じ状況、しかも同じ心理的状况に身をおくことが可能だと見なされている。「同情」や「共感」とかわるわけである。別の言い方をすれば、相手に感情移入し、「われわれ」関係を容易につくることができる。付け加えれば(6)の「俺の身にもなってみろ」をより一般化した表現「人の身にもなってみろよ」では、「人」が話者をさす場合は話者へ、第三者をさす場合はその第三者へ、それぞれ視点を移動させあるいは投影させ、共感することを要求している。他方、ドイツ語では、視点の移動は、せいぜい空間的場の移動にとどまり、移動先の対象人物の心理にまでは立ち入らない傾向にある。相手は、発話者にとってあくまで対話相手に過ぎず、話者の感情は話者の立場にとどまる。ICHとSIE/DUの関係あるいは対立はそのまま維持される。

日本社会で他人に迷惑をかけるようなことをした場合、(8)と(9)のように、しばしば第三者にまで視点を投影させ、共感を要求する言語表現がある。聞き手に第三者の立場に立ち、その心理（感情）にまで入り込み、その迷惑を想像させるわけだ。

(8) 人の迷惑になるよ。

(9) あのお姉さんが困っているよ。

また、次の表現(10)~(12)は、第三者を引き合いに出すものだ。

(10) 運転手さんに怒られるよ。

(11) あのおじさんが見ているよ。

(12) みんなに笑われるよ。

これらの表現の視点は、話者に固定されていない。話者が聞き手である子供を含めた視点からそれ以外の第三者を見ているからだ。そして第三者から見られている自分（聞き手）を想像させる。話者は、聞き手にたとえば、「みんなに笑われるよ」ということによって、聞き手を取り込んだ「われわれ」視点を示す。その上で、それ以外の他者を引き合いに出して、その人たちから笑われてしまうから、いやでしょ、はずかしいでしょという形でいやな感情を共有させようとしているわけだ。

#### 4. コミュニケーション行動評価概念と「共感」

##### 4.1. 基本的なコミュニケーション行動評価概念

上記の KRKV 比較から明らかにされた日独表現の視点の違いは、別の言語単位についても認められる。ここでは、日独で翻訳関係にある形容詞で検証してみよう。

円滑なコミュニケーション行動において基本的な態度の一つとされるのは、相手への配慮であろう。この配慮は、日本語のコミュニケーション行動評価概念（Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens; 以下 BKKV と略す）で言えば「思いやりのある」に相当し、そのドイツ語の対応概念は „rücksichtsvoll“ という形容詞と関わる。<sup>12)</sup> ところが、一見機能上同じように見えるこの両概念が、実は深いところで異なっているようなのだ。そしてその違いは、先に挙げた両言語の等価表現 („Denke doch auch mal an andere!“ と「他の人のことも考えなさい」など）と関連しているようだ。ところで、BKKV 研究では、主に辞書記述を利用する。ここでも、ここ数年以内に刊行された複数の辞書記述に基づいて、当該の BKKV を比較対照する。<sup>13)</sup>

#### 4.2. 「おもいやりのある」と „rücksichtsvoll“

「思いやり」についてはつぎのように説明されている（下線は筆者による。以下同様）：

- 『新明解』：「相手の気持になって考えてやること（気持）。同情すること（気持）」(S.191)  
vgl. 「同情する」：「差し迫って困っている相手の苦しみ・悩みを、相手の立場に立って理解し、そのうちにいい目も出ることが有るのだから、しっかり生きるようにせよと温かい言葉をかけること」(S.986)
- 『岩波』：「同情すること。その気持」(S.153)  
vgl. 「同情する」：「他人の気持、特に苦悩を、自分のことのように親身になって共に感じること。かわいそうに思うこと。あわれみ。おもいやり」(S.846)
- 『広辞苑』：「③自分の身に比べて人の身について思うこと。相手の立場や気持を理解しようとする心。同情。」(S.404)  
vgl. 「同情」：「他人の感情、特に苦悩・不幸などをその身になって共に感じること」(S.1882)

日本語の「おもいやり」は、「相手の立場にたって考える」といった意味が基本にある。すなわち、「相手の気持ちになって」、「親身に」考えるということである。相手の気持ちを自分のこととして理解しようという姿勢である。まさに感情移入が要求されている。「同情」という説明語が3冊の辞書に共通していることに注目していい。共に感じる、すなわち「共感」といった含意もある。したがって、コミュニケーションの際の視点は、自分だけでなく、相手の心理の中にまで達している。あるいは、相手の気持ちを自分の中に取り込む姿勢だ。この語義説明からも、日本語社会では、視点は空間的にも心理的にも移動可能であることが裏付けられる。視点は、発話者自身だけでなく、他者にまで拡張され、さらに、その心理的側面にも入り込む。別の言い方をすれば、相手のところに視点を投影させ、心理的な「われわれ」の関係をつくることができる。では、ドイツ語の等価概念 „rücksichtsvoll“ はどうであろうか。

„rücksichtsvoll“:

- *LDaF*: „so, dass er sein Verhalten an den Gefühlen, Bedürfnissen o.Ä. von anderen Menschen orientiert ↔ rücksichtslos, egoistisch“ (S.821)

vgl. „Rücksicht“: „das Bestreben, auch die Gefühle, Bedürfnisse, Wünsche usw anderer Menschen zu beachten, od. das Bestreben, einer Sache nicht zu schaden“ (S.821)

- *GDaF*: „‘voller Rücksicht, Rücksicht zeigend’“ (S.832)

vgl. „Rücksicht“: „‘Verhalten gegenüber anderen Personen, das die besonderen Gefühlen, Interessen, Bedürfnisse, Schwächen dieser Personen angemessen berücksichtigt, feingefühlig beachtet’“ (S.832)

„Feingefühl“: „‘in den zwischenmenschlichen Beziehungen besonders fein reagierendes Empfinden, das gegenüber Personen zu taktvollem Verhalten befähigt’“ (S.326)

- *DuW*: „in taktvoller, schonender Art u. Weise“

vgl. „taktvoll“: „Takt zeigend, mit Takt[gefühl]“ (S.1511)

„Takt“: „Feingefühl (im Umgang mit anderen Menschen)“ (S.1511)

„schonen“: „jmdn., etw. nicht strapazieren, rücksichtsvoll, behutsam behandeln“ (S.1349)

ドイツ語は、相手の気持ちに気をつけ、尊重し、その気持ちに沿うよう  
に行動するというのが基本的な意味のようだ。まなざしは相手に送っては  
いるが、心理的な立場はあくまでも話者自身にある。相手の希望を考慮し  
た行動をすることであって、行動基準はあくまで発話者にある。す  
なわち、ドイツ語では、発話者の視点からのみ事態が捉えられる傾向にあ  
るようだ。ICH と SIE の対立的関係はそのまま維持されているというこ  
とだ。

## 5. 印象の違いの説明

ドイツ語と日本語について、機能上等価な常用句と翻訳関係にある KRKV、対応する BKKV を比較対照した結果、視点の位置に差があることが明らかになった。ドイツ語に比べると、日本語表現では視点の移動が空間的だけでなく、心理的にも可能であることが検証された。それにより、相手の身になるという意味での「共感」という説明概念がここでも有効なことがわかった。言語化の際の「共感」表現の選択は、日本語の多くの場面で見られるようだ。それが日本語を使ったコミュニケーション行動の通常性の一部をつくり出していると考えられる。この通常性を背景にもつ日本語話者が、そのような通常性をもたない文脈で発せられるドイツ語表現を耳にすると、ある種のギャップを感じるわけである。

ここで最初の問題にもどってみよう。„Was kann ich für Sie tun?“ というドイツ語表現に私は違和感を覚えたと言頭で述べた。なぜ「偉そうな」「恩着せがましい」「突き放したような」といった印象をもったのかを上記の通常性との関連で説明してみよう。日独両表現の印象の違いについては、視点の移動にともなう「共感」の有無がかかわっているようだ。ドイツ語のように基本的に空間的にも心理的にも視点がほぼ固定し、話し手と聞き手との対立関係が明示的に言語化されると、「突き放した」という印象を与える。なぜなら、共感関係がつかれないからである。また、„für Sie“ という表現が、「恩着せがましい」と「偉そうな」という印象と関係している。とりたてて「相手のため」と明言すると、日本語社会で期待される謙虚さという態度が示せない。聞き手のためという表現は、相手にその恩を負わせるように聞こえてしまう。この関連で言えば、ZDF のドイツのニュース報道番組で時折発せられる „Und wir haben jetzt weitere Nachrichten des Tages für Sie in unserem Überblick.“ という表現に対しても同様に違和感を覚えるのはこのためだ。<sup>14)</sup>

常用句というのは、その言語の社会的文化的背景のもとで形成されてきたものなので、表現内容やその使用法にその言語社会の特徴が反映されている可能性がある。本稿では、その一端を明らかにしようと試みた。この定型表現どうしの比較はこれまで十分になされていない。このような表現どうしの体系的な比較といった課題は今後の課題である。

## 注

\* 本稿は、ドイツ学術交流会 (DAAD) 客員教員招聘プログラムおよび2001年度国際交流基金人物派遣フェローシップ・プログラムによるドイツ滞在 (2001年9月~2003年1月) の研究成果の一部である。なお、本稿は、レーゲンスブルク大学で2002年度冬学期に開講した授業 (Übung: „Kontrastive Idiomatik - Deutsch und Japanisch -“) での学生との議論に基づいている。積極的に議論に参加してくれた学生たちに対してここで改めて感謝する。

- 1) 類似の表現としては、„Kann ich etwas für Sie tun?“、„Kann ich Ihnen helfen?“などが挙げられる。
- 2) 松木 (1992) によれば、視点に関わる「見る」ことについては、見る主体、見られる客体、見る場、見える様子の4要素が区別できるという。本稿でいう視点は、どこから見るのかという見る場/見る立場のことを意味する。
- 3) 視点の可動性については、池上 (2000) にある川端康成の『雪国』の冒頭文 (「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」) に関する説明が関連している。その文の翻訳 („The train came out of the long tunnel into the snow country.“ / „Als der Zug aus dem langen Grenztunnel herauskroch, lag das Schneeland.“) では、見る主体と見られる客体が明示され、両者の対立関係が鮮明である。他方、日本語の原文では見る主体と見られる客体との区別があいまいであり、叙述の視点が一義的に決定できない (とくに290-293ページ)。
- 4) もちろん、日本ではオフィスの制度化の度合いが一般に低い。また、厳密に言えば、教授と学生の関係は日本とドイツでは異なるようだ。後述のように、学生は教授に対して従順にあるまじうことが日本では期待されているからである (vgl. Marui / Ohama: 1986)。
- 5) この表現の「援助の申し出」という意味については、„tun“ に関するつぎの辞書定義を参照。„/jmd., Institution/ etw. für jmdn., etw. 'gezielt aktiv werden, um jmdm. zu helfen, etw. zu bewirken': (...) /in der kommunikativen Wendung/ kann ich etw. für Sie ~? /wird höflich gefragt, wenn man jmdm. helfen möchte/“ (GDaF: S. 1054)。
- 6) そのため、この表現は、人生相談や医者問診やカウンセリングでも使用される。
- 7) 言語社会ごとの表現とそれが使われるコンテクストとの間に何らかの規約上の関係があると仮定しておく (vgl. Coulmas 1981)。
- 8) レーゲンスブルク大学で客員教員を3学期間つとめた経験に基づく。当初、日本人学生とは異なるドイツ人学生の発話態度に面食らったものだ (Nishijima 2003)。
- 9) 日本人学生と教員との会話では、学生が主体的に話さない点については Marui / Ohama (1986) を、日本人が会話において一人では話をまとめず、共同して作り上げる点については水谷 (1987) を参照。
- 10) 言語学分野の「共感」という用語は、もともと、久野たちが日本語の統語論的現象を説明するのに用いた概念である (久野 1978)。牧野は、英語と日本語の機能的に対応する文章 (料理法など) を比較対照し、「共感」という概念が日本語文章のさまざまなところに入り込んでいることを明らかにしている (牧野 1978)。
- 11) 宮崎・上野 (1985) では、「共感」に関する欧米の心理学研究で取り上げられている

るのは佐伯（1978）の言う「擬己化」であって「ペルソナの擬人化」ではないという批判がなされている。この区別は、本稿の日独表現における視点の違いに対応している。ドイツ語は視点の移動はあっても、その当該人物の心理には立ち入らないので、まさに「擬己化」に対応しているといえる。（とくに145-147ページを参照。）

- 12) BKKV についてだが、丁寧さ研究は、さまざまな下位領域からなる。その中のひとつに、行動規範の研究がある。当該社会で通用している丁寧さにかかわる行動規範と言語使用との関係を扱う領域である。その行動規範を明らかにする一つの手段として、BKKV がある。BKKV とは、たとえば「ていねい」、「親切」、「生意気」といったような他人や自己のコミュニケーション行動を肯定的、否定的に評価する概念のことである。これらの概念を分析することによって、当該社会で有効な行動規範にアプローチしようというものである。ところで、ある言語に特有の行動規範というものは、その一言語の分析だけでは、なかなか明らかにできない。そこで、たとえば、ドイツ語と日本語といったように、異なる言語どうしを比較対照するという手続きをとると、対照される言語の特徴が抽出しやすい (vgl. Marui *et al.*: 1994)。なお、Ide *et al.* (1992) では、日本語「思いやりのある」と英語の対応する形容詞 („considerate“) など10の対応概念が比較されている。その方法論上の問題点については、別稿を準備中である。
- 13) 使用する辞書は、『新明解国語辞典（第5版）』（1997）、『岩波国語辞典（第6版）』（2000）、『広辞苑（第5版）』（1998）、„Langenscheidts Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache“ (1998)、„Wörterbuch Deutsch als Fremdsprache“ (1999)、„Deutsches Universalwörterbuch A-Z“ (1996) である。
- 14) ある社会では、相手の希望に沿おうという態度を示すことが、礼儀にかなっているとされる (vgl. Brown/Levinson 1987)。これは、ドイツ語社会にはあてはまることであろう。しかし、日本語社会では必ずしもそうとは言えない。日本語社会では、相手への好意は直接表現することなく、相手のことを心配しているという気遣いを言語化することによって礼儀正しく振舞うことができるのだ。この違いは大きいと言わざるをえない。ついでに付言すれば、„Was kann ich für Sie tun?“ は、形式的には相手に何をしてほしいのかを尋ねるものである。相手の希望を聞くことになる。日本社会では一般に、相手にその希望を尋ねるという形式はとらない傾向にある。たとえば、依頼表現で、「この論文に目を通したいですか」という問いは日本語では不自然であるが、それを字義通りに訳したドイツ語は、普通である。事実、„Möchten Sie dieses Schreiben lesen?“ といった表現で、ドイツ人学生が頼みごとをするという状況に戸惑いを感じた経験がある。

### 参考文献

- Brown, P. / P. Levinson: *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- Coulmas, F.: *Routine im Gespräch. Zur pragmatischen Fundierung der Idiomatik*. Wiesbaden: Athenaion, 1981.

- Ide, S. / B. Hill / Y.M. Carnes / T. Ogino / A. Kawasaki: „The concept of politeness: An Empirical Study of American English and Japanese“. In: R.J. Watts / S. Ide / K. Ehlich (eds.): *Politeness in Language. Studies in its History, Theory and Practice*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter, 1992, 281-297.
- 池上嘉彦: 『「日本語論」への招待』大修館, 2000.
- 久野 暉: 『談話の文法』大修館, 1978.
- 牧野成一: 『ことばと空間』東海大学出版会, 1978.
- Marui, I. / R. Ohama: „Analyse japanischer Interaktionsbeispiele - als Vorbereitung zur Kontrastierung Japanisch-Deutsch -“. In: 『愛媛大学教養部紀要』Nr. 19, 1986, 223-267.
- Marui, I. / Y. Nishijima / K. Noro / R. Reinelt / H. Yamashita: „Concepts of Communicative Virtues (CCV) in Japanese and German“. In: Hellinger, M. / U. Ammon (eds.): *Contrastive Sociolinguistics*. Berlin etc.: Mouton de Gruyter, 1996, 385-409.
- 松木正恵: 『「見ること」と文法研究』. In: 『日本語学』11/9, 1992, 57-71.
- 水谷 修: 『話しことばと日本人 一日本語の生態一』. 創拓社, 1987.
- 宮崎清孝・上野直樹: 『認知科学選書1 視点』. 東京大学出版会, 1985.
- Nishijima, Y.: „Deutsche von außen gesehen: Abschiedsvorlesung von Prof. Yoshinori Nishijima“, Regensburg: Vorlesung gehalten am 22. 01. 2003 an der Universität Regensburg, Ms.
- 佐伯 胖: 『イメージ化による知識と学習』. 東洋館書店, 1978.

## 辞 書

- 『岩波』: 西尾実ほか編: 『岩波国語辞典』第6版, 2000.
- 『広辞苑』: 新村出編: 『広辞苑』第5版, 1998.
- 『新明解』: 金田一京助ほか編: 『新明解国語辞典』第5版, 三省堂, 1997.
- DUW: *Deutsches Universalwörterbuch A-Z*. 3., völlig neu bearb. und erw. Aufl. Mannheim usw.: Dudenverlag, 1996.
- GDaF: *Wörterbuch Deutsch als Fremdsprache*. Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1999.
- LDaF: *Langenscheidts Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache*. Berlin usw.: Langenscheidt, 1998.

## Perspektive in Routineformeln im Deutschen und Japanischen

Yoshinori NISHIJIMA

Im allgemeinen sagt man, dass es zur reibungslosen Kommunikation im Alltag erforderlich ist, Rücksicht auf andere Gesprächsbeteiligte zu nehmen. Was ist dann die „Rücksicht auf andere Gesprächsbeteiligte“? Was man darunter versteht, kann von Sprache zu Sprache unterschiedlich sein. Um dies deutlich zu machen, ist es nützlich, Routineformeln einer Sprache mit denen einer anderen zu kontrastieren, weil sie mit der Erhaltung der kommunikativen Normalität der jeweiligen Sprachen zusammenhängen, die auf ihrer zwischenmenschlichen Kooperation beruht. Das Ziel der vorliegenden Arbeit liegt darin, durch die Kontrastierung von äquivalenten Routineformeln im Deutschen und Japanischen herauszuarbeiten, was man zur Erhaltung der kommunikativen Normalität der jeweiligen Sprache besonders gegenüber anderen beachten soll und aus welcher Perspektive bzw. von wessen Standpunkt aus Routineformeln der jeweiligen Sprache formuliert sind.

Das folgende Beispielpaar im Deutschen und Japanischen ist zwar funktional äquivalent, aber die deutsche Formulierung (1a) wirkt auf mich „überheblich“ oder „distanziert“, wenn sie z.B. in der Sprechstunde eines Professors gesprochen wird, was hingegen in seiner japanischen Entsprechung (1b) nicht zu spüren ist:

- (1) a Was kann ich für Sie tun?  
b dooshimashita? (Was ist los mit Ihnen?)

Dieser negative Eindruck am deutschen Beispiel ist m.E. auf unterschiedliche Formulierungsweisen der Formeln in beiden Sprachen zurückzuführen. Hinsichtlich der Formulierung des Beispiels (1a) liegt die

Perspektive auf der Seite des Sprechers („ich“). (1b) dagegen ist diesbezüglich nicht eindeutig und zeigt damit „Empathie“ des Sprechers zum Hörer. Solcher Unterschied ist in einem anderen äquivalenten Beispielspaar noch klarer festzustellen:

- (2) a Denke doch auch mal an andere!  
b hokano hitono kotomo kangaenasai!

(2a) und (2b) sind funktional, syntaktisch und lexikalisch äquivalent. In diesem Sinne sind sie zueinander synonym und stehen in der Übersetzungsrelation. Der Standpunkt, von dem aus die Ausdrücke formuliert sind, scheint zwar in beiden Sätzen gemeinsam auf der Seite der dritten Personen zu sein. Aber es ist in Wirklichkeit unterschiedlich, ob man sich in sie einfühlt. (2a) fordert nämlich den Angesprochenen auf, seinen Gedanken auf die Bedürfnisse o. Ä. der dritten Personen („andere“) zu konzentrieren. (2b) verlangt darüber hinaus den Angesprochenen, sich in den Zustand der dritten Person zu versetzen und dasselbe Gefühl gemeinsam zu haben. Solcher Unterschied ist auch in dem folgenden synonymen Paar zu beobachten:

- (3) a Versuch doch mal, dich in meine Lage zu versetzen!  
b oreno minimo nattermiroyo!

(3a) fordert den Angesprochenen, sich vorzustellen, an der Stelle des Sprechers zu sein. (3b) klagt darüber hinaus über die schlimme Situation des Sprechers und verlangt weiter vom Hörer, das Gefühl des Sprechers mitzufühlen.